



新介護 ^{ムーブメント} *movement* 19 尾崎 雄さんが歩く

日本のマザー・テレサをめざす 山谷のホスピス「きぼうのいえ」

東京・山谷 すみだリバーサイド支援機構

治療困難な病気の日雇い労働者を受け入れるホスピス「きぼうのいえ」が門戸を開いて1年半。一銭も公の補助金は貰わず「日本一のケア」を提供する秘密は？“施設”と“在宅”の狭間をさまようケアの明日を求めて山谷のドヤ街を訪ねた。



山谷のメインストリートに建つ「きぼうのいえ」

東京・台東区清川町2丁目界隈は、1泊1000円台から2000円台の「ドヤ」と呼ぶ簡易宿泊所がひしめく通称山谷のドヤ街。朝から仕事にあふれた日雇い労働者らがたむろする。無料診療所の順番を待つ行列が並ぶ横丁を抜けると、4階建の集合住宅「きぼうのいえ」がある。

死に行く人の枕もとで……

「お静かにどうぞ」と導かれて2階の一室のドアを押すと、そこは別世界だった。やわらかい、ささやくような、えもいわれぬハーブのメ

施設でも自宅でもない終の棲家



「希望の家というよりも無謀の家?」をつくってしまった山本雅基施設長と美恵夫人

ロデーが……。日本人形と一緒にベッドに横たわる女性重著(90歳の枕もとで外国人の女性が、やさしい眼差しをそそぎながら弦を爪弾い



病床の女性は90歳。ナチュラル・ターミナルケアの一環としてミュージック・サナトロジーを受けている。日本で初めての試みだ

ていた。弾き終えた指を患者の手にさしのべ「ツカレナイデスカ?」と尋ねると、「いい音楽だねえ。あんたはやさしくて綺麗だねえ。」「アリガトウ。ジャア、モウ、イツキョク」……。

ハープを演奏するのはキャロル・サックさん。アメリカ人のボランティアだ。名刺の肩書は「ミュージック・サナトロジースト」。ホスピスや病院で死に行く人の枕もとで癒しに携わるホスピスケアの専門家である。ミュージックセラピスト(音楽療法士)と違って患者の脈、体温、呼吸などバイタルサインを確かめながら一人ひとりの患者にふさわしい曲

をふさわしい仕方ではハープを奏でる。中世の修道院で行われていた教会音楽による看取りを現代に生かす試みで、ミュージック・サナトロジーという(直訳すれば死生音楽学)。音楽だけでなく生理学、看取り、神学などの基本教育が必要だ。キャロルさんはアメリカ・モンタナ州の専門学校で2年間のトレーニングを受けて資格を取った。有資格者は世界に50人。日本では「きぼうのいえ」のキャロルさんが初めて。ここで3人の患者を看取ってきた。



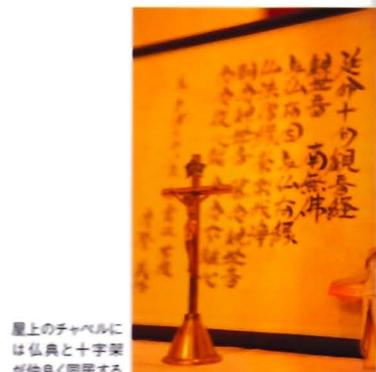
仏僧もカトリックのシスターと一緒にボランティアのミーティング



足裏のマッサージで万病を癒すリフレクソロジーを施すボランティア

患者はドヤの中で病気になったり、路上で倒れていたり、救急車で運ばれたりして福祉事務所から紹介された末期患者。ほとんどが高齢者で、身寄りがない人々。た

ファミリーボランティアで支えあう



屋上のチャペルには仏典と十字架が併良く同居する



散髪は浄土宗の僧侶がボランティアで。患者の注文は「タコ社長」カット

ボランティア30人。訪問診療・看護から厨房委託・在宅酸素まで外部資源として活用・連携している医療機関、事業所、NPO、団体の数は合わせて33。

ホームレスのためのホスピスを

とえ家族はいても縁が途切れているだけに、このボランティアは家族同様。「ファミリーボランティア」と呼んでいる。

ファミリーの手に負えない医療、看護、介護と厨房やソーシャルワーカーなど専門サービスは、病院・診療所、在宅ホスピス専門医、訪問看護ステーション、介護会社などと契約。施設長と看護主任がソーシャルワーカーと相談しながら一人ひとりの患者の生活と病状に合わせてケアプランを練り、医師・訪問看護師・ヘルパーらプロが、定期的または必要に応じて各種サービスを提供してくれるよう手配する。これは欧米のホスピスに似たやり方だ。

患者の定員は21人で、すべて個室だから周囲に気兼ねせず、最期までその人らしいケアができる。スタッフは有給11人とファミリーボラ



医療は在宅医療の往診医が来てくれる

東京都認可の第二種社会福祉事業としてオープンしたのは2002年10月。開設・運営は医療法人でも社会福祉法人でもNPO法人でもない、有限責任中間法人の山谷すみだりバーサイド支援機構だ。小児癌など難治性疾患児童と家族の宿

今日の見舞客(右)は元演歌歌手。昔「釜ヶ崎エレジー」をレコードに吹き込んだ



家族はどこに? チヤベルに安置された元患者の遺骨

泊施設を設置・運営するNPO法人ファミリーハウス事務局長だった山本雅基さんと、妻で看護師の美恵さんが「ホームレスのためのホスピス」と立ち上げた。

はじめ借家で開始しようと「数百軒の不動産屋」にあたってが、ことごとく門前払い。仕方なく土地を買って建物作りから着手した。「無謀の家」と山本夫妻は笑う。事業費1億6500万円は借金と賛同者の寄付。運営費は患者の生活保護費とキリスト教会などからの寄付金で賄っている。目指すは「マザー・テレサの『死を迎える人の家』日本版」(山本夫妻)。

この特徴は①スタッフが共有する宗教・宗派を超えた人間愛の連帯感、②老衰死を含めてあらゆる末期患者の看取りをする、③施設のように見える「在宅」ケアの場である。医療制度のホスピス(緩和ケア病



棟)だと生活サービスが十分にできないうえ、癌・エイズ以外の末期患者を受け入れることができない。医療施設でない特別養護老人ホームやグループホームでは外部の医療サービスを制限される。ところが、ここは「在宅」だから医療保険と介護保険を利用して有償・無償の社会資源をフルに取り入れ、医療・福祉・生活のサービスを患者一人ひとりに合わせて提供できる。解決すべき課題はあるが、コミュニケーションの先駆的な取り組みである。

尾崎 雄 ジャーナリスト
1942年生まれ。65年早稲田大学政経学部卒。日本経済新聞社で婦人家庭部次長、『日経Woman』編集長、編集委員等を歴任。元仙台白百合女子大学教授。(社)成年後見センター・リーガルサポート理事。老・病・死を考える会世話人。著書に『人間らしく死にたい』『介護保険に賭ける男たち』など。

撮影: 浅田悠樹